

関西大学独逸文学会研究発表概要 (第108回研究発表会)

1. ドイツ-トルコ系移民文学研究の歴史

米村 恵吾

ガストアルバイターとして多くの移民がドイツへと移住し、生活するようになってから既に約半世紀が経過した。ドイツ国内の移民人口の増加に伴って、彼らの手による文学作品の数も増加していった。当初はそれらの作品は一般市民の間でも、学問上でも大きな注意を払われるものではなかった。しかし、移民による文学出版の日常化や、ドイツ国外の文学研究者によるドイツ『移民文学』の再評価、Emine Sevgi Özdamar等の移民作家の文学賞の受賞などを経て、現在では様々な研究が行われるようになってきている。

前述の通り、ドイツ-トルコ系に限らず『移民文学』は当初殆ど注目されなかった。それらが最初に目をつけられた際も、文学作品ではなく移民の実際の生活を反映した社会的・経済的な資料として注目され、文学研究の間で取りざたされることはなかった。その後、Özdamarの登場などを境目にアイデンティティに関する研究などが増え、現在でもそれらが中心的なテーマとなっている。

ドイツの『移民文学』の中でも、ドイツ-トルコ系の作家による作品は、ドイツ国内のトルコ人の人口や作品数の多さと比例して、『移民文学』研究の中でも頻繁に取り上げられる作品群である。今回はそれらドイツ-トルコ系『移民文学』研究に焦点を絞り、それらの作品に対する研究がどのような過程を経て現在に至り、どのような課題が存在するか、今後どのような研究の方向性が考えられるかということについて考察を行った。

2. 日独における安楽死問題の先駆者

——森鷗外とマルティン・メンデルゾーン

金城ハウプトマン朱美

日本で最初に安楽死 (Euthanasie) について言及したのは森鷗外だと言われている。鷗外はマルティン・メンデル (ス) ゾーンの論文を抄訳し、そのタイトルを『甘暝の説』と訳したが、これまで原文が見つかっていなかった。今回、発表者がこの原文を発見したことをきっかけに、日本とドイツにおける安楽死問題について取り組んだ。鷗外訳と原文を比較してみると、鷗外が全文訳していなかったことにすぐ気付く。今回の発見により日本の終末医療の起源はメンデルゾーンの看護学にあることが分かった。

日本でもドイツでも終末医療の在り方について議論されているが、ドイツで安楽死というと、現代でもナチス時代に行われた安楽死を想起させ、否定的にとらえられがちである。そのため「死へと導く援助」(Sterbehilfe) という言葉が代用されることが多いのが現状である。

本発表では、安楽死問題研究の先駆者である森鷗外とマルティン・メンデルゾーンに注目し、抄訳と原文を比較して翻訳されていない箇所から文化の差異を読み取り、比較文化論へと発展させることを目標とし、日独における安楽死問題について考察した。

3. 講演

Die Magie der Zunge. Geschmack, Gedächtnis und Kultur

Andreas Hartmann

Die Gedanken meines Vortrags basieren auf empirischen Erhebungen. Mit Hilfe von Schreibauffrufen habe ich hunderte von Berichten zusammengetragen, in denen Menschen aller Altersstufen und Sozialschichten von der lebensgeschichtlichen Bedeutung bestimmter Geschmackserlebnisse erzählen. Diese Berichte kennzeichnet durchweg eine hohe atmo-

sphärische und emotionale Dichte. Im Kern geht es dabei immer um die
Lebensthemen der Identität und der sozialen Beziehungen. Meine
Beispiele zeigen: Geschmackserinnerungen sagen uns, wo wir
herkommen und wer wir sind, und in ihnen schlummert eine beachtliche
literarische Energie.